

■エンディング前の準備

▽もしこのページを読んでいる際に別ページまで見えてしまっているならば、表示サイズを調整するなどして、1ページのみが見えるようにしてください。

▽エンディング中、次をクリックするという指示が出てくるときがあります。このとき、

クリックする箇所はこのように表示されます。

クリックすると別ページに飛ぶので、そのページを読み進めていってください。ページを読み進め、特に次の指示のないままそのページが終わった場合は、次のページに移動して続きを読み進めていきます。

それでは、先程のクリック箇所をクリックし、エンディングに進みましょう。

■エンディング

▽投票結果と合っているものをクリックしてください。

- 1 【トーマス・ハット】が犯人として単独最多投票された
- 2 【ボブ・マンガン】が犯人として単独最多投票された
- 3 【ラウル・ワイルド】が犯人として単独最多投票された
- 4 【ジェフ・クック】が犯人として単独最多投票された
- 5 【2人以上の人物】が犯人として最多投票された

■犯人は誰だ？

▽次の文章を読み上げてください。

あなたは話し合ったが、誰が犯人かを決めることはできなかった。
そのとき表の扉の方から、こつこつと足音が近付いてきていた。捜査官たちが今になってやっと到着したのだ。

あなたは捜査官に、自分達が見聞きした内容、推理した事柄を伝えた。しかし捜査官たちはほとんどあなたの話には取り合わず、一方的に結論を下した。

捜査官

「皆さんのご意見は承知しました。しかし我々が考えるに、客観的に見て犯人はやはり——ボブ・マンガンに違いありません」

捜査官たちはボブ・マンガンを連行していく。そのあまりの不自然な様子に、ラウルは思い当たることがあった。

ラウル

「お前らもしかして……フラッツの息が掛かった連中か」

ラウルの知る限り、ギャング・フラッツはボブ・マンガンがシルバレーイクの大会に出るのを妨害しようとしていた。それで彼らは息の掛かった捜査官を送り込んできたのだ。あなたの達の反論も虚しく、ボブは捜査官たちに連れ去られていった。

▽次をクリックして、エピソードに進んでください。

- 「エピソード」に進む。

■ トーマス・ハットが犯人だ

▽次の文章を読み上げてください。

あなたは達はトーマス・ハットが犯人だという結論に達した。
他の3人の鋭い視線を受けて、トーマスは慌^{あわ}てて反論した。

トーマス 「ち、違います！ 僕はやってません！」

ラウル 「かもな。だが、それはこれから来る捜査官たちに言ってくれ」

トーマス 「ま、待ってください！ 妹の結婚式があるんです。取り調べなんか受けてたら、結婚式に間に合いません……」

ジェフ 「それは気の毒ですが、仕方がありませんよ。もしも、それでもどうしても結婚式に出たいというなら……」

ジェフの視線の先には裏口の扉がある。

ちょうど表の扉の方から、こつこつと足音が近付いてきていた。事件解決の知らせを受けた捜査官たちが、今になってやっと到着したのだ。

もう時間は残されていなかった。

気付けば、トーマスは裏口に向かって走り出していた。

遅れて捜査官たちが表の扉を開けて入ってくる。残った三人は犯人だと思われるトーマスが逃げ出してしまったことを伝えたが、捜査官たちは何故かトーマスのことには一切取り合わなかった。

捜査官

「確かに、トーマス・ハットのが逃げたことは残念です。しかし我々が考えるに、彼は犯人ではないでしょう。状況的に見て、犯人はやはり――ボブ・マンガンに違いありません」

捜査官たちはあなた達の言葉を無視し、ボブ・マンガンを連行していく。そのあまりの不自然な様子に、ラウルは思い当たることがあった。

ラウル

「お前らもしかして……フラッツの息が掛かった連中か」

ラウルの知る限り、ギャング・フラッツはボブ・マンガンがシルバレーイクの大会に出るのを妨害しようとしていた。それで彼らは息の掛かった捜査官を送り込んできたのだ。あなた達の反論も虚^{むな}しく、ボブは捜査官たちに連れ去られていった。

▽次をクリックして、エピソードに進んでください。

- 「エピソード」に進む。

■ボブ・マンガンが犯人だ

▽次の文章を読み上げてください。

あなたはボブ・マンガンが犯人だという結論に達した。
他の3人の鋭い視線を受けて、ボブは慌てて反論した。

ボブ

「待ってくれ、俺じゃない！ 明日大会があるのに俺が殺す訳ねえだろう！」

そのとき表の扉の方から、こつこつと足音が近付いてきていた。事件解決の知らせを受けた捜査官たちが今になってやっと到着したのだ。

あなたは捜査官に、自分達が見聞きした内容、推理した事柄、そしてボブが犯人だと思われることを伝えた。

捜査官

「皆さんのご意見は承知しました。確かに、犯人はボブ・マンガンに違いないでしょう」

捜査官たちはボブ・マンガンを連行していく。そのあまりにスムーズな流れに、ラウルは引っ掛かるものがあった。

ラウル

「お前らもしかして……フラッツの息が掛かった連中か」

ラウルの知る限り、ギャング・フラッツはボブ・マンガンがシルバレイクの大会に出るのを妨害しようとしていた。それで彼らは息の掛かった捜査官を送り込んできたのだ。つまり今回の事件は、ボブを嵌めるためのフラッツの罠。ということは——ボブは犯人ではないのか？

ラウルがその疑念を確かめる間もなく、ボブは捜査官たちに連れ去られていった。

▽次をクリックして、エピソードに進んでください。

- 「エピソード」に進む。

■ラウル・ワイルドが犯人だ

▽次の文章を読み上げてください。

あなたはラウル・ワイルドが犯人だという結論に達した。
他の3人の鋭い視線を受けて、ラウルは慌てて反論した。

ラウル

「違う、俺じゃない！俺が事件を起こす訳ないだろう」

そのとき表の扉の方から、こつこつと足音が近付いてきていた。事件解決の知らせを受けた捜査官たちが今になってやっと到着したのだ。

あなたは捜査官に、自分達が見聞きした内容、推理した事柄、そしてラウルが犯人だと思われることを伝えた。しかし捜査官たちはほとんどあなた達の話には取り合わず、一方的に結論を下した。

捜査官

「皆さんのご意見は承知しました。しかしラウル・ワイルドは犯人ではないでしょう。我々が考えるに、犯人はやはり——ボブ・マンガンに違いありません」

捜査官たちはボブ・マンガンを連行していく。そのあまりの不自然な様子に、ラウルは思い当たることがあった。

ラウル

「お前らもしかして……フラッツの息が掛かった連中か」

ラウルの知る限り、ギャング・フラッツはボブ・マンガンがシルバーレイクの大会に出るのを妨害しようとしていた。それで彼らは息の掛かった捜査官を送り込んできたのだ。あなた達の反論も虚しく、ボブは捜査官たちに連れ去られていった。

▽次をクリックして、エピソードに進んでください。

- 「エピソード」に進む。

■ジェフ・クックが犯人だ

▽次の文章を読み上げてください。

あなたはジェフ・クックが犯人だという結論に達した。
他の3人の鋭い視線を受けて、ジェフは諦めたように口を開いた。

ジェフ

「ええ、そうです。私が——いや、もう取り繕う必要もないか。被害者を拳銃で撃ったのは俺だ。だが……俺が殺したわけじゃない。俺が撃ったとき、奴はもう死んでいたんだ」

ラウル

「しかし、そんな奇妙な言い分で、今から来る刑事どもは納得しないだろう。わざわざそんなことをする理由が説明できなきゃ、あんたは間違いなく殺人犯にされちまうぜ」

ジェフ

「俺はただの使いっばしりで、計画の全貌は聞かされていない。だが……その理由ってやつは、実は俺もずっと考えていたんだ」

▽ジェフ・クックは、次の中から自分の依頼主だと考えるものを1つ選んでください。
全員、ジェフが選んだものをクリックします。

1 【トーマス・ハット】が依頼主だ。

2 【ボブ・マンガン】が依頼主だ。

3 【ラウル・ワイルド】が依頼主だ。

4 【ギャング・フラッツ】が依頼主だ。

5 【ギャング・グリップス】が依頼主だ。

■整理用ページ

このページは整理用のダミーページです。このページにエンディングに関わる内容は書かれていません。

■ジェフ・クックの証言

▽次の文章を読み上げる。

ジェフの考えを聞き届けたラウルは、眉間みけんに皺しわを寄せた。

ラウル

「それは……残念だが理屈が通っていないだろう。少なくとも、今から来る刑事たちは納得しないだろうぜ」

ジェフ

「そうか……なら、悪いが今の話は忘れてくれ。奴は俺が殺した。それで構わない」

ジェフが話を切り上げた直後、事件解決の知らせを受けた捜査官たちがやってきた。捜査官たちはジェフの自白を聞き、彼を殺人犯として連行していった。

▽次をクリックして、エピソードに進んでください。

- 「エピソード」に進む。

■ジェフ・クックの証言

▽次の文章を読み上げる。

ジェフの考えを聞き届けたラウルは、眉間みけんに皺しわを寄せた。

ラウル

「グリップスが依頼人か。残念だが、それは違うんじゃないか」

ジェフ

「しかし、奴は確かにそう名乗った」

ラウル

「俺の知る限り、グリップスはボブ・マンガンにソルトレイクの大会で優勝してもらいたいはずなんだ。だから、それを邪魔するようなことをするとは考えにくい」

ジェフ

「そうか……じゃあ、俺は何か思い違いをしていたのかもな。悪いが今の話は忘れてくれ。被害者は俺が殺した。それで構わない」

ジェフが話を切り上げた直後、事件解決の知らせを受けた捜査官たちがやってきた。捜査官たちはジェフの自白を聞き、彼を殺人犯として連行していった。

▽次をクリックして、エピソードに進んでください。

- 「エピソード」に進む。

■ジェフ・クックの証言

▽次の文章を読み上げる。

ジェフ

「俺の依頼主は、フラッツというギャングだ。奴らは俺に身元を偽り、自分達はグリップスだなんて名乗っていたが、本当はフラッツだったに間違いない」

ラウル

「なるほど。じゃあフラッツはあんたに死体を撃たせて、何を狙っていたんだ？」

ジェフ

「奴らの狙い。それは……」

▽ジェフ・クックは、次の中から依頼主の狙いだと思うものを1つ選んでください。全員、ジェフが選んだものをクリックします。

1 【トーマス・ハット】が狙いだ。

2 【ボブ・マンガン】が狙いだ。

3 【ラウル・ワイルド】が狙いだ。

4 【ジェフ・クック】が狙いだ。

5 【マイヤー・ブラウン】が狙いだ。

■依頼主の狙い

▽次の文章を読み上げる。

ジェフ 「ボブ・マンガン。依頼主の狙いは、あんただったはずだ」

ボブ 「俺か？ 人気者はつらいな」

ジェフ 「俺に既に撃たれた死体をさらに撃たせることで、1発の銃声で2発の弾丸を叩き込まれた死体を作る。まるであんたの超人的な早撃ち^{ファストドロウ}で殺された死体だ」
トーマス 「じゃあ、ジェフさんの依頼主はボブさんに殺人の罪を被せようとしたってことですか？」

ラウル 「筋は通ってる。確かにフラッツは、ボブ・マンガンが大会で優勝するのを阻止しようとしていた。おい、ジェフ。あんたそれを証言するってなら、俺が手をまわして罪を軽くしてやるぜ。司法取引^{しほうとりひき}ってやつだ」

ジェフ 「駄目だ、それはできない。……娘を人質^{ひとしち}に取られている」

ボブ 「娘だって？ じゃあ今回の事件、あんたは脅されてやらされたのか？」

ジェフは黙って頷き、それから3人に向かって深く頭を下げた。

ジェフ 「頼む。娘を助け出してくれ。もちろんあんたらに俺の頼みを聞くような義理^{ぎり}がないってのはわかってる。だが、この通りだ」

ラウル 「……ジェフ、あんたは俺が地元警察まで連行する。おとなしくお縄につけ」

トーマス 「でも、ジェフさんは脅されてやっただけで……」

ラウル 「勘違いするな。娘さんを助けるためだ。この警察には、フラッツの息が掛かっているはずだ。ならジェフが連行されれば、そのことをアジトに伝えるにいく奴が必ずいる。そいつ追って娘さんを見つけ出す」

ボブ 「なら俺も行くぜ。子供のピンチに動かないようじゃガンマン失格だ」

ラウル 「待て待て。あんたはソルトレイクの大会があるだろう」

ボブ 「そりゃ優勝を逃すのはちとばかし惜しい^おが、人命が掛かっている。それに俺の早撃ちなら、敵が銃を抜く前に仕留め^{しとどめ}られる。人質がいても心配なしだぜ」
ラウル 「それはそうかもしれないが……あんたが大会に出ないと俺が困るんだよ」

ラウルとボブが言い争っていると、突然トーマスが「あの！」と声を上げた。彼はいつの間にかこの辺りの地図を手にはしている。

トーマス 「あの、僕なら間に合うと思います」

ラウル 「間に合うって何が？」

トーマス 「警察署にジェフさんを連れて行って、アジトに向かい娘さんを助け、それからソルト・レイク・シティに向かう。アジトの場所次第ですけど、ぎりぎり間に合うはずですよ。その、ドライブが趣味なんです」

ボブ 「じゃあ決まりだ。ラウル、これならあんたも文句ないだろう」

ラウル 「まあ、そういうことならな。しかし車はどうする？」

ジェフ 「それなら近くに用意してある。初めから、この辺りに停車することはわかっていたからな。旧型車オールドタイプで悪いが、好きに使ってくれ」

トーマス 「いえ、むしろ都合が良いです。旧型の方が乗り慣れているんで。ただ、一つだけお願いしても良いですか？ 全部終わった後、少しでも車を貸してください。妹の結婚式に行きたいんです」

ジェフ 「ああ、もちろんだ。家族は大切だからな」

ジェフ ジェフはトーマスに車の鍵キを投げて渡す。

作戦は決まった。

男たちは互いの顔を見渡し、無言で拳を突き合わせた。

▽次をクリックして、エピログに進んでください。

- 「エピログ」に進む。

■整理用ページ

このページは整理用のダミーページです。このページにエンディングに関わる内容は書かれていません。

■エピソード

▽次の文章を読み上げる。

警察から解放された後、真っ暗な街でボブ・マンガンは頭を抱えていた。

現場検証とやらで列車は動かせないと聞き、街を巡^{めぐ}ってまだ起きているタクシードライバーを見つけるまでは良かった。

しかしそのドライバーが言うには、ここからソルト・レイク・シティまで向かうとなると、どんなに飛ばしたって大会が始まるまでには間に合わないというのだ。

そこをどうにかと様子倒しても、ドライバーは「今からソルトレイクなんて人間技じゃあないよ」と首を横に振るばかりだった。

ついには泣き落として、車だけは貸してもらえたことになったが、しかしタクシードライバーにできないことが素人に出来る通りはなかった。

すべてが嫌になって、まだ開いている酒場を見つけて入ると、カウンターに知った顔を見つけた。トーマス・ハットだ。

彼もこの酒場に來たばかりのようで、隣に座^{ぐち}って愚痴^{こぼ}を零す。

ボブ 「今からじゃあ、もう大会には間に合わねえ。まったく、何のために頑張^{がんば}って

捜査したんだか」

トーマス 「それは災難^{さいなん}ですね。まあ、僕も似たようなものなんです。今からじゃ妹の結婚式には間に合わなくて……」

ボブ 「お互い大変だな」

トーマス 「車さえあれば、なんとかあったんですけど。誰も貸してくれる人がいなくて」

ボブ 「俺の方は車があっても間に合わんとき。地元^{じよん}のタクシードライバーに言われちまったよ。こっちは車だけは借りられたんだが無^む用の長物^{ちやうぶつ}さ。そうだ、俺が借りた車、あんたが使うか？ 車があれば間に合うんだろう」

トーマス 「そんな、いいんですか？」

ボブ 「そりゃあ構^{かま}わんさ。どのみち俺の最速伝説は明日の10時で終^{しゆう}わり。大会を逃げ出した腰抜け野郎^{やろう}だってな」

トーマス 「10時……会場はソルト・レイク・シティでしたよね。すみません、マスター。さっきの僕とこの人の注文、キャンセルにして頂^{いただ}けますか？」

ボブ 「おいおい、急にどうした？ あんたはともかく、俺はここで飲んでくぜ」

トーマス 「間に合いますよ、ソルトレイク。結構ぎりぎりになりますけど」

ボブ 「嘘^{うそ}だろ？ いや、マジで言^いってるのか？」

トーマス 「はい。僕、ドライブが趣味なんで」

ボブ 「妹の結婚式はどうする？」

トーマス 「それも大丈夫です。結婚式の会場もソルトレイクなので」

その翌日。夕刊の一面を飾ったのは、金色のベルトを巻き、満面の笑顔を浮かべるボブ。

マンガンの姿だった。ボブの写真の横には、彼の優勝時の台詞も記されている。

ボブ 「最速の男は誰だって？ そりゃあ俺様に決まってるが、まあ俺と同じぐらい速い奴がいねえわけでもない。そいつはガンマンじゃねえけどな。今回の賞金は、そいつと山分けにするつもりさ」

トーマス・ハットは車を飛ばしに飛ばし、なんとか妹の結婚式に間に合った。だが、出迎えてくれた妹はカンカンに怒っていた。

——どうしてこんなにギリギリになるの、なんで連絡してくれなかったの、人の頼み事を聞いてばかりだからこんなことになるんだよ。

そして妹は最後にはわっと泣き出し、「ほんとに心配したんだから」と抱きついてきた。

トーマス 「心配させてごめんな。列車が遅れちゃって。でも、別に危険なことに巻き込まれたりしてないから。ほら、こうしてピンピンしてるし」

心配性の妹には、昨晩の出来事は話せなかった。まさか兄があんな無茶苦茶な運転をしていたと知ったら、結婚式どころではなくってしまうに違いない。

花嫁姿に身を包んだ妹は、本当に幸せそうだった。

事件から一週間後。

ラウル・ワイルドはフロリダのビーチで、ハンモックに揺られながらビールを飲んでいった。ここ数日、ラウルはずっとこのバカンス生活を続けているのだ。

ボブ・マンガンを護衛し、無事にソルトレイクの会場まで送り届けて欲しい。繋がりのあるギャングからそんな依頼を受けたのが二週間前のこと。

まさか殺人事件に巻き込まれるとは思わなかったが、なんとか依頼は成し遂げた。

ラウル 「最速の男達に乾杯！^{かんぱい}」

今日何度目かになる乾杯をして、ラウルはバカンスを満喫するのだった。

事件から三年後、ジェフ・クックは釈放^{しゃくほう}された。

ジェフが脅されたただとわかったのは、交通事故で死亡した依頼人の車から麻薬が発見されたからだ。その捜査で家宅搜索が行われ、家からは大量の麻薬と、列車内で起きた

事件の計画書が発見された。

ジェフがすぐに釈放しゃくほうされなかったのは、そこまで明らかになっても、彼が決して口を割らなかったからだ。もしも自分が正直に話し、それが依頼主の仲間に漏れたら……万が一でも娘を危険に晒さらす訳にはいかなかった。ジェフの黙秘もくひで捜査は長引き、彼の釈放は随分ずいぶんと伸びてしまった。

今、ジェフは暗い路地裏に隠れ、人を待っていた。いつ来るのかはわからない。ずいぶんと待ったせいで、足元には吸い殻がらが溜ためまっていた。

そして——目当ての人物を見つけたとき。ジェフは思わず顔がほころんでしまうのを、頬に力を入れて堪こらえなければならなかった。

遠くの道を、娘が友達と楽しそうに歩いている。

娘は前に見たときよりも、もうずいぶんと大人びていた。この年頃の三年という長さを痛感する。

けれど、それが見ただけで十分だった。もちろん会いたい気持ちはあるが、もう二度と娘を怖い目に合わせる訳にはいかない。だからこれでいいのだ。

ジェフ 「じゃあな、愛マイスウィートしい娘。パパみたいに悪い子にはなるんじゃないぞ」

そう呟くと、ジェフは紫煙しえんを燻くゆらせ雑踏ざつたつへ消えていった。

▽次をクリックして、「おわりに」に進んでください。

• 「おわりに」に進む。

■エピソード

▽次の文章を読み上げる。

事件の翌日。

夕刊の一面を飾ったのは、金色のベルトを巻き、満面の笑顔を浮かべるボブ・マンガンの姿だった。写真の横には、彼の優勝時の台詞も記されている。

ボブ

「最速の男は誰だって？ そりゃあ俺様に決まってるが、まあ俺と同じぐらい速い奴がいねえわけでもない。そいつはガンマンじゃなくて運転手^{ドライバー}だけだな。今回の賞金は、そいつと山分けにするつもりさ」

トーマス・ハットは車を飛ばしに飛ばし、なんとか妹の結婚式に間に合った。だが、出迎えてくれた妹はカンカンに怒っていた。

——どうしてこんなにギリギリになるの、なんで連絡してくれなかったの、人の頼み事を聞いてばかりだからこんなことになるんだよ。

そして妹は最後にはわっと泣き出し、「ほんとに心配したんだから」と抱きついてきた。

トーマス

「心配させてごめんな。列車が遅れちゃって。でも、別に危険なことに巻き込まれたりしてないから。ほら、こうしてピンピンしてるし」

心配性の妹には、昨晩の出来事は話せなかった。まさか兄がギャングとカーチェイスを繰り広げていたなんて聞いたら、結婚式どころではなくなってしまうに違いない。

花嫁姿に身を包んだ妹は、本当に幸せそうだった。

事件から一週間後。

ラウル・ワイルドはフロリダのビーチで、ハンモックに揺られながらビールを飲んでいった。ここ数日、ラウルはずっとこのバカンス生活が続けているのだ。

ボブ・マンガンを護衛し、無事にソルトレイクの会場まで送り届けて欲しい。繋がりのあるギャングからそんな依頼を受けたのが二週間前のこと。

まさか殺人事件に巻き込まれるとは思わなかったが、なんとか依頼は成し遂げた^{なと}。

ラウル

「最速の男達に乾杯^{かんぱい}！」

今日何度目かになる乾杯をして、ラウルはバカンスを満喫^{まんきつ}するのだった。

事件から一カ月後。

ジェフ・クックは釈放しゃくほうされた。裏でラウルが手を回してくれたという話も聞いたが、実際どうなのかはわからない。

今、ジェフは暗い路地裏に隠れ、人を待っていた。いつ来るのかはわからない。ずいぶん待ったせいで、足元には吸い殻がらが溜まっていた。

そして——目当ての人物を見つけたとき。ジェフは思わず顔がほころんでしまうのを、頬こゝろに力を入れて堪えなければならなかった。

遠くの道を、娘が友達と楽しそうに歩いている。

それが見ただけで十分だった。もちろん会いたい気持ちはあるが、もう二度と娘を怖い目に合わせる訳にはいかない。だからこれでいいのだ。

ジェフ 「じゃあな、愛マイスウイートしい娘。パパみたくに悪い子にはなるんじゃないぞ」

そう呟くと、ジェフは紫煙しえんを燻くゆらせ雑踏ざつたつへ消えていった。

▽次をクリックして、「おわりに」に進んでください。

- 「[おわりに](#)」に進む。

■エピソード

▽次の文章を読み上げる。

事件の一週間後。

ラウル・ワイルドは冷や汗を掻きながら、ギヤング・グリップスのボスと対面していた。ボブ・マンガンを護衛し、無事にソルトレイクの会場まで送り届けて欲しい。グリップスからそんな依頼を受けたのが二週間前のこと。

殺人事件というイレギュラーがあったとは言え、ラウルはその依頼を成し遂げることができなかった。

ボス 「なあ、ラウル。俺達は今回の仕事、結構な金を提示したよな。それだけこの仕事

事が大切だったからだ。しかしそれを、あんたはしくじった」

ラウル 「聞いてくれ、ボス。確かに俺は失敗したかもしれない。だが、現場の捜査官にまでフラッツの連中の息が掛かってるのに、どうやってボブを守る？ 俺も保安官だ、警察には逆らえん。わかってくれよ」

ボス 「欲しいのは言い訳じゃない。俺達の掟は知ってるよな。ミスを取り返したいなら行動あるのみだ。フラッツのアジトの場所は……教えるまでもないな？」

ラウル 「ボス、流石にそれは冗談だよな？ 俺一人で突っ込んでも無駄死にするだけだ。そんなことで警察の協力者を失うつもりなのか？」

ボス 「こっちの協力者は、フラッツの協力者より使えないみたいだからな。ここらで首を据え替えようと思ってな」

万事休す。ラウルが夜逃げの算段を練っていると、ボスが突然その相貌を崩した。

ボス 「と、昨日までは本気で思ってたんだがな。やるじゃないかラウル。どうやったかは知らんが、俺が言う前にフラッツに突っ込んでくるとはな」

ラウル 「……なんの話だ？」

ボス 「とぼけなくて良い。明日には新聞にも載るだろう。フラッツは解散だってな」

寝耳に水だった。全く状況はわからないが、とりあえず言うだけは言ってみる。

ラウル 「じゃあ、報酬はもちろん払ってくれるよな」

ボス 「悪いがそれは別の話さ」

金は手に入らなかったものの、ラウルはひとまず助かったらしいことに安堵していた。

事件の翌日。

ボブ・マンガンは牢屋ろうやの中で、誰が差し入れたのかわからない新聞記事を読んでいた。記事にはこう書かれている。

——最速伝説、ここに終止符しゅうしふ！ ボブ・マンガン大会前にまさかの逃亡！ 銃を持った最速の男はただの腰抜け野郎だったのか！？

どうやらボブが拘置所こうちしよにいる事実はまだ広がっておらず、大会前に逃げ出したということになったらしい。正直、腰抜けだと言われるぐらいなら、まだ逮捕されたと記事にされた方がマシだった。

ボブ 「まったく、銃を持った最速の男も法律の前にはかたなしだぜ」

しょぼくねながらボブは呟き、別の記事を見ようと新聞をめくる。すると、新聞の間から小さな紙切れが落ちてきた。紙切れを拾うと、そこにはこう書かれていた。

——あんたを嵌はめたのはフラッズというギャングだ。ラウルに聞けば詳しい話を教えてくれるだろう。奴らのアジトはそこから南西に20キロ、フォート・ブリッジャーにある。

紙切れを読み進めるうち、ボブの瞳に活力が戻ってくる。

ボブ 「なるほど、俺を嵌はめた連中は法律アウトルーの外か。だったら、好きにやっても構わねえな。お前らが喧嘩を売ったのは、正真正銘しょうしんしょうめい、最速の男だって教えてやるぜ」

事件から一週間後、ボブは証拠不十分で釈放された。その翌日、ギャング・フラッズが何者かの襲撃を受け、解体まで追い込まれたというニュースが流れたが、それはまた別のお話だ。

事件当日の深夜。

真っ暗な街でトーマス・ハットは頭を抱えていた。

現場検証中で当然列車は動かせない。だからソルト・レイク・シティに向かうには車が必要なのだが、こんな夜中に車を貸してくれる人など見つからなかった。

もうおしまいだ……妹の結婚式に間に合わない。そうトーマスが頭を抱えていると、すぐ近くでブレーキ音がした。目の前に車が停まったのだ。乗っていたのは、ジェフ・クックだった。

ジェフは普段の敬語ではなく、乱暴な口調でトーマスに言う。

ジェフ 「乗れ、トーマス」

トーマス 「は、はい。でもなんで車が？」

ジェフ 「細かい話は後だ。妹の結婚式に出たいんだろう」

言われるがまま、トーマスはジェフの車に乗り込んだ。車が急発進する。

ジェフ 「この車は貸してやる。それであんたは結婚式に向かえばいい。だが、その前に俺の頼みも聞いて欲しい」

トーマス 「頼みですか？」

ジェフ 「ああ。今回の事件は、フラッツというギャングがボブ・マンガンを嵌めるために仕掛けた罠だ。最後に来た捜査官たちの態度で確信が持てた。で、俺はその片棒を担がされた」

トーマス 「片棒を？ ということは、ジェフさんが事件の犯人だったんですか？」

ジェフ 「娘を人質に取られて他に選択肢はなかった。だが、敵がわかった今なら反撃に出られる。まずは今から娘を取り返す」

トーマス 「でも……ジェフさんは言われた通りやっただけですよ。フラッツも娘さんを返してくれるのでは？」

ジェフ 「どうだかな。娘を返してほしければ、また別の仕事をしろと言ってくるだけかもしれない。一度言うことを聞かせた相手は骨の髄までしゃぶりつくす。それが連中のやり口だ」

トーマス 「……なるほど。それで、僕に頼みというのはなんですか？」

ジェフ 「今から連中のアジトに向かう。娘は必ず取り戻すが、問題は連中から逃げる方法だ。腕の良いドライバーがいる」

トーマス 「それを僕に？」

ジェフ 「できるか？」

トーマス 「……はい、できます。妹の結婚式に出るためですから」

ジェフ 「恩に着る。逃げ切ることができたら、俺は娘と妻——もう離婚したから元妻か。二人を隠して、フラッツを潰しに行く」

トーマス 「一人で、ですか？」

ジェフ 「直接手を下すのは俺じゃない。銃を持った最速の男さ。ボブに自分が誰に嵌められたのかを教えてやる。後は、あいつが全部片付けてくれるだろう」

それから——。

トーマスは車を飛ばしに飛ばし、なんとか妹の結婚式に間に合った。だが、出迎えてくれた妹はカンカンに怒っていた。

——どうしてこんなにギリギリになるの、なんで連絡してくれなかったの、人の頼み事を聞いてばかりだからこんなことになるんだよ。

そして妹は最後にはわっと泣き出し、「ほんとに心配したんだから」と抱きついてきた。

トーマス

「心配させてごめんな。列車が遅れちゃって。でも、別に危険なことに巻き込まれたりしてないから。ほら、こうしてピンピンしてるし」

心配性の妹には、昨晚の出来事は話せなかった。まさか兄がギャングとカーチェイスを繰り広げていたなんて聞いたら、結婚式どころではなくなってしまいうに違いない。花嫁姿に身を包んだ妹は、本当に幸せそうだった。

事件から二週間後。

それはジェフ・クックにとっては夢のような時間だった。危険に巻き込まないようにと距離をとった妻と娘との生活。

娘は流石にジェフの顔を覚えていなかったが、会ってからすぐにラウルのことをパパと呼んでくれた。不思議に思っていたが、妻の話を聞いて謎は解けた。

妻

「だって私、あなたのことをヒーローだって娘に教えてたんだもの。きっとあの子、ギャングから助け出してくれたあなたのことをヒーローだって思ったのよ」

しかし、この幸せな生活ももう終わりにしなければならない。

ボブがフラズを潰してからもう一週間も経っている。これ以上身を隠し続ける必要はないし、普通に暮らしていくなら、もう自分は二人のそばにはいられない。今回みたいに危険に巻き込んでしまうからだ。

眠っている妻と娘に口付けして、ラウルは隠れ家を後にする。

ジェフ

「じゃあな、愛しい娘。^{マイスウイート}パパみたいに悪い子にはなるんじゃないぞ」

そう呟くと、ジェフは紫煙を^{しえん}煙らせ^{ざつと}雑踏へ消えていった。

▽次をクリックして、「おわりに」に進んでください。

- 「[おわりに](#)」に進む。

■おわりに

これにて「ファストドロウ・ダブルガンズ」は終幕です。

他のキャラクターの背景に興味があれば、キャラクターの資料を互いに見せ合っても構いません。

もし犯人の特定方法や事件の背景に興味があれば、シナリオ解説(03_commentary.pdf)をご覧ください。